

# 京極読書新聞 <第95号>

発行日 平成29年12月1日(金)  
京極町生涯学習センター湧学館

平成29年度「後志の文学講座」

## ～小樽ゆかりの文学者ビッグスリー～ 「啄木・多喜二・整のよもやま話」

平成29年度の「後志の文学講座」では、小樽に関係の深い著名な文学者三人のエピソードを紹介することになりました。

1回目はテーマを「石川啄木の『小樽日報記者時代』」として11月24日に開催しましたが、今回の京極読書新聞でも、啄木が新聞社「小樽日報」の記者として過ごした115日間について皆様に紹介します。なお、2回目は12月8日に小林多喜二を、3回目は12月22日に伊藤整を予定しています。まず、小樽に来るまでの啄木の年譜は次のとおりです。



### ◆ 岩手県時代



明治19年	2月20日 岩手県日戸村に生まれる（明治18年10月27日説あり）
明治20年	渋民村に転移
明治28年	渋民尋常小学校卒業、盛岡高等小学校入学
明治31年	盛岡尋常中学校入学
明治35年	10月盛岡中学校退学（2回のカンニングで譴責処分）、上京
明治36年	2月 帰郷
明治37年	10月2日～10月18日 第1回目の小樽滞在（※） 10月末 上京
明治38年	5月 詩集「あこがれ」刊行、堀合節子との婚姻届け提出 6月 盛岡市に新居
明治39年	母と妻を連れて渋民村に帰る 4月 渋民尋常高等小学校の代用教員 12月 長女京子誕生
明治40年	4月 渋民尋常高等小学校免職（校長排斥のストライキを生徒に指示）

（※） この時の小樽訪問は、詩集を東京で刊行するための上京資金を、小樽中央駅に勤めていた義兄・山本千三郎と次姉・トラに借用するのが目的でした。しかしこの時トラは病中にあり、啄木の上京等の援助を乞う目的は果たせませんでした。

▼ 2ページ目へ続きます

## ◆ 函館・札幌時代

明治40年	5月	浜民村を出て函館に到着
	6月	弥生尋常高等小学校の代用教員
	8月	函館日日新聞の記者
	8月25日	函館大火で被災
	9月14日	札幌到着
	9月16日	北門新報社に入社
	9月23日	詩人野口雨情と初めて会う



## ◆ 小樽日報記者時代 (明治40年9月27日～明治41年1月19日)

小樽日報社初期の主なメンバーを紹介します。社長 白石義郎、主筆(編集長) 岩泉江東、三面記者主任 野口雨情、三面記者 石川啄木、事務長 小林寅吉となっています。

小樽日報では当初から下記のとおり内紛が続きました。

明治40年	9月27日	北門新報社を退社し小樽へ向かう
	10月 1日	野口雨情と小樽日報社へ入社して、創刊号の編集会議に参加
	10月 5日	雨情はかつての上司、主筆の岩泉江東に対する不満を啄木に話し、それを聞いた啄木は雨情とともに主筆の岩泉追い出し工作を決意
	10月15日	小樽日報創刊号を発刊
	10月16日	一時、啄木が雨情を誤解する
	10月30日	啄木は岩泉より、増俸することと三面の主任にするという話を聞く
	10月31日	岩泉の謀略にかかり、雨情退社、啄木は岩泉に一層の反感を抱く
	11月10日	啄木は函館時代の友人沢田天峰を主筆にするよう白石社長に推薦
	11月16日	岩泉が社内騒動の責任をとって辞任
	11月22日	沢田天峰入社
	12月12日	主筆の岩泉排斥以来、啄木を快く思わなかった小林事務長は啄木と口論となり啄木に暴力をふるう、啄木はこの日から入社せず
	12月21日	小樽日報に啄木退社の広告を掲載
明治41年	1月19日	家族を小樽に残し、単身釧路へ出発

小樽日報の白石社長は釧路新聞の社長でもあったため、啄木に釧路行きをすすめました。釧路新聞の若き編集長となった啄木は田舎記者として腕をふるいましたが、しかし、釧路新聞の記者時代も七十日しか続きませんでした。その後、一時函館に家族を呼び寄せたのち、単身で再び東京へ向かいました。一年足らずの北海道での漂泊生活は、明治45年4月13日、二十七歳でこの世を去るときまで、啄木の胸に郷愁のように染み込んでいました。

京極の歴史 入門編②は次号掲載予定です

## 【参考資料】

「石川啄木と北海道 その人生・文学・時代」

(福地順一著) 鳥影社

従来の石川啄木研究に抜けがちな北海道時代について調査・研究を重ねた論考集。北海道時代の啄木年譜・著作年譜も掲載。

[H910.2フク]



「現代日本文学アルバム4 石川啄木」学研作家や作品ゆかりの写真の数々、詳しい解説や文学旅行ガイドなど、巨匠作家の全てを堪能できるビジュアルブック。[910.2ゲン]

## “壇の浦合戦”を考える(4) —平家の敗因をめぐって—

〈『平家物語』を読む会〉 村山 功一

### 4. 補給途絶説

源義経の奇策により、多くの兵船が操船不能となった平家軍はその後有効な反撃が出来ず一挙に劣勢となりました。その理由として“補給”に注目した菱沼一憲\*は、屋島の合戦以降の平家軍は、ほぼ補給を断たれた状態であり、それは根拠地である彦島も同様であった。一方源氏方は、続々と源氏に味方する豪族、在地武士団さらに都からの輸送によって豊富な物資の備蓄があったと推定しています。その結果平家軍は午前中の合戦で大量に矢を消費してしまい、非情な義経の攻撃に対する反撃も思うに任せなかったのだらうと述べています。

この補給の問題については、平家首脳も十分認識していたはずですが。だからこそ、午前中の合戦に全力を傾注し、短期決戦を指向したものと思われます。重大な弱点を抱えた平家にとって、それは悲壮な決断だったでしょう。こうに考えると、末期の平家を覆う哀れさが滲み出ているように感じられ、何とも切ない気持ちになります。

以上の平家敗因と合戦経過を下表にまとめてみました。

### まとめ

表に示した(i)、④を除く①~③は、合戦の推移に伴って発生したもので、いずれもほぼ史実と思われる平家にとっての重要な敗因です。

さらに『平家』本文「鷄合壇浦合戦」「遠矢」「先帝身投」「内侍所都入(ないしどころみやこいり)」という一連の壇の浦海戦記を読むにつけ、もちろん“物語”であるものの、清盛以後の平家一門が抱え持つ大きな弱点が感じられます。それは、良く言えば鷹揚(おうよう==おおらかでゆったりしていること)、優雅、自信といった気風なのですが、同時に不測の事態に対する備えの甘さであり油断でもあります。

たとえば、それは、奇襲・奇策を得意とする天才的戦術家の義経という人物を過小評価していたこと。海戦に対する過剰な自信のため、熊野水軍を味方につけた源氏の實力を誤認したこと。阿波民部重能の立場と心情を理解せず、裏切りの可能性への警戒を怠ったこと。戦場に安德帝はじめ高貴な非戦闘員を多数伴っていたこと等々……。

経過	潮流 (i)	平家軍の状況	敗因	備考
6:00頃	東流	矢合わせ		
11:00頃	↓	↓ 平家優勢		平家軍矢を大量に消費 源氏軍壊滅の危機
正午頃	潮流停止	↓ 多数の兵船 操船不能	①	義経奇策を断行(iv)
14:00頃	↓ 西流 ④	↓ 平家劣勢	②	平家軍矢の欠乏
16:00頃	↓	↓ 壊滅	③	(阿波民部裏切り) (ii、iii)

### 凡例および解説

- (i) ~ (iv) は、敗因説と関わる本文の順序。
- ①~④は合戦経過とともに発生した敗因となる事態。
- 経過(時間)は金指正三の推定による。

\*本文に記述される敗因に関わる事態発生順序と、実際に生じた事態の順序は異なっており、(iv) → (ii) → (iii) → (i) となる。

なお(i)の潮流は敗因とはならないが、西流を④としたのは、水夫・梶取を失って漂流状態になった平家兵船は、当然徐々に西方へ流されるわけで、その光景を「平家」作者を含む当時の人々が潮流変化による敗因と結びつけたのであろうと考えたから。

開戦に際し、多少の潮流の利を考慮し、補給不足も念頭に置いて、午前中に一気に勝敗を決しようとした平家の戦術は、まず妥当と思われる。しかし、予想外の戦況に対する備えは全く考慮していないように読み取れます。源氏軍を追い詰めた正午近くには「戦勝ちぬ」と平家勢は歓声を挙げたと述べられており、義経への警戒、民部重能の動向への注意などまったくなされていないようです。また、子を入質にされている阿波民部の苦しく複雑な心情を理解せず、忠義の士である民部の裏切りを招いてしまいました。ただ一人新中納言知盛が民部の挙動に不審を抱き「斬るべし」と進言したが、総帥宗盛はこれを許さず民部に対する警戒もしなかったとあります。このエピソードは作者の創作かも知れませんが、宗盛はじめ平家首脳陣には合戦という非情な場における状況の判断、分析、認識に甘さがあったことは事実のようです。そして最後に、平家が安徳帝はじめ国母建礼門院、二位尼ほか高貴な女性、女官、一門の妻子、高位の文官、一門出身の僧侶といった多数の非戦闘員を危険な戦場に伴ったことです。これも合戦の常識から外れているように思います。たしかに、一門・一族の強い絆という見方もできますが、こうした高貴な非戦闘員を警護するために、少なからぬ兵員を必要とします。これは、貴重な兵力を割くということです。また、合戦の最中でも常にこうした人々の安否を気遣いつつ戦うのでは、余裕のある作戦行動を妨げることになるでしょう。平家の真意はどこにあるのか？不思議に思います。

これまで述べてきた三つの具体的敗因は、壇の浦に臨む平家がすでに抱え込んでいた“体質としての弱点”によって、自らが招いた結果だったように感じられました。

最後に平家の名誉のために一言。ともかく平家は“合戦”に敗れて滅亡しました。つまり、武士としての面目を施したということです。平家を滅ぼし武家の棟梁となった源氏がやがて内部の権力争い、陰謀、暗殺によって滅びたのは大きな違いです。平家は最後まで武士として“猛き者”として歴史上から姿を消しました。その潔さが、人々の心にいっそう哀れさと感動を誘い、珍しくも“敗者”平家の物語が成立したのではないのでしょうか。

(完)



(注)

\* (菱沼一憲『源義経の合戦と戦略 - その伝説と実像』角川選書) による  
(湧学館蔵/289.1ミナ)

京極読書新聞 第96号は  
1月中旬頃発行予定です



## 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京極町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.jp>

